
心の底に潜む街

椎名 奎

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

心の底に潜む街

【Nコード】

N0132B

【作者名】

椎名 奎

【あらすじ】

眠る事で行き来する、無秩序で無道德的な奇人達の街。そこで生活する身勝手な彼らを狩る殺人鬼。思い出深い町に越して来た彼女は、愛犬タマと共に迷い込んだその街で、動物の被りものを頭に被って生活する男と出会った。

第一話：夜の街に朝は来ない（前書き）

その他としましたが、少しホラー要素が含まれていますので、苦手な方はご注意ください。といっても過激な描写はありませんので。

第一話：夜の街に朝は来ない

美しい闇夜に靴音を響かせながら、バケツを持った男が石畳の道を歩いている。瘦躯で長身の男は、笑った口が描かれたマスクに、大きな目玉が描かれた黒のサングラスをかけ、耳から垂れた鎖の先にリアルな耳がついたイヤリングを揺らしていた。手に下げたバケツの中には、どろどろの液体と毛羽立った刷毛が突っ込んであり、巻いた紙の束を小脇に抱えている。

男は不意に立ち止まった。一陣の風が地上を掠め、石畳に埋め尽くされた白い花弁を空高く舞い上げた。冬が逆戻りしたかのような空間に、男は身体を回転させながら、口の端から笑い声を漏らした。雪のように落ちゆく花弁とは逆に、男の心が高く高く舞い上がる。沈黙に栄光有れ、と。

*

『いつでも帰っておいで』

見上げる少女に青年は優しく囁く。

穏やかな声。

爽やかに浮かべる笑顔。

大好きな日向の香り。

頭の上に置かれた手が、いつそう少女の涙を誘う。

青年はしゃがむと、少女の大粒の涙をハンカチでそっと拭いた。

濡れた心に暖かい光が射すように、心がすつと軽くなる。

少女は薄い笑みを浮かべた。

青年も、爽やかな風が吹くような優しい笑顔を浮かべる。

『きつと会いに行く。だからあたしを、忘れないで』

少女は祈るような気持ちで約束した。

ふいに香った柔らかい甘さに目を覚ますと、フロントガラスに桜の並木道が長く続いているのが見えた。閑静な住宅街を割る道に人の姿はなく、早くも散り始めた桜の花弁だけが賑わっている。そこを一人分の荷物を積んだ引越業者のトラックが、エンジン音を響かせながら走行していた。荷物の持ち主は、Ｔシャツにジーパン、靴は愛用の蛍光色のスニーカーを履いた、鈴丘野々という十四才の少女だ。彼女の膝の上には、同行者のタマという名前の中型犬が、少し開いたサイドガラスから入る風で、白黒の毛並みを揺らされながら、気持ち良さそうに眠っている。運転席には、体格の良いおじさんが、前方を見遣りながら何かを囁んでいた。

野々はフロントガラスに目を遣り、今しがた見た夢に溜め息をついた。それは彼女が七年前に住んでいた町での、特別で大切な記憶の断片だった。親の仕事の都合で引越して以来、時々こうして同じ夢を見た。そして目を覚ましては、決まって溜め息を漏らすのだ。けれど今は気分がすこぶる良かった。また親の勝手な都合で野々と愛犬タマは引越しを余儀なくされたわけだが、次の地は、あれから一度も行かなかった、思い出深いその町だったからだ。

二人と一匹を乗せたトラックは、桜の並木道を抜けると、やがて目的地に停車した。そこは住宅街とマンションに挟まれた、横並びの商店の道路脇。

引越しのおじさんは、着いたげ、と言っや、颯爽と車から下りた。野々はぼうつとした表情で首を巡らすと、愛犬と共に車から下り、同時に伸びをした。

軒を連ねて並ぶ建物の一画に、『キリン堂』と屋根に掲げた木造二階建ての小さな文房具店がある。その店の主人がトラックの音を聞きつけ、硝子戸をカラリと開けて顔をひょいと出した。柔和な

顔立ちに、背の低いなで肩の男。野々の叔父、鈴丘恭介だ。

「久しぶりだね野々ちゃん。随分大きくなって」

「こんにちは叔父さん！またお世話になります」

野々は大きな声で元気良く挨拶すると、頭をぺこりと下げた。

野々は一人っ子で、生まれて間もない頃に母親を病気で亡くした父子家庭だ。だが元冒険家の父庄介は、娘のためにと我慢していた冒険心が、十四年目に限界を迎え、以前過ごした叔父夫婦に野々を託すと、遠い外国の地へと旅立ったのだ。

「自分の家だと思って、くつろいじゃってね」

恭介はニコニコと笑いながら軽い口調で言うと、野々の足下からひよっこり顔を出すタマの頭を撫でた。

「話には聞いていたけれど、まったく警戒心ゼロだね君。番犬というより大きな愛玩犬だなこりゃ」

タマは得意そうな表情で、赤い舌をぺろりと出す。

「野々ちゃん来た？」

店の奥から女の人の声が聞こえ、二人の元に声の主が現れた。清楚な服装に端正な顔立ち、白梅の香りを漂わせて笑顔を浮かべる、恭介の妻の美和だ。

「こんにちは美和さん！お世話になります。一緒に暮らせるなんて、あたしすっごく嬉しい！」

野々は祈るようなポーズで目を輝かせた。というのも、美和は野々にとつて理想の大人の女性像そのものだからだ。小さな文具店というより、料亭の女将さんの方がしっくりするほど美しい。

「私もよ。一緒に買い物に行ったりお料理をしたりしましょうね」

二人はニコリと微笑み合った。

野々の荷物は、二階の奥に窓が一つある東側の四畳半部屋に移された。荷物はさほどないが、ディスプレイに時間がかかり、全てを終えた頃には、窓の外は夜のとばりに包まれていた。

「ふー、お疲れさ〜ん」

野々は自分を労うと、ベットのの上に仰向けに寝転がって、ゆっくり

り瞼を閉じる。今日の出来事が、頭の中を順不同に駆け巡る。アマゾンへ行った父は今頃どうしているだろう？などと思いつつながら、いつしか寝息を立てていった。

*

雲一つない夜空には、見た事もないような無数の星が、大渦を巻いてキラキラと瞬いている。足下では鈴虫の転がす羽音が響き、どこからか風鈴の涼しげな音色が微かに聞こえてくる。

野々は街灯に照らされた石畳の道を、愛犬タマと一緒に歩いていた。道を挟んだ両側には、一軒家の家並みはずっと先まで続いているのだが、どの家もちよつと変わった個性的な形をしている。例えば、丘にあげた客船の家だとか、不時着した円盤形の家だとか、離陸直前の飛行船の家だとか、中にはエジプトをかなり忠実に再現した縮小ピラミッドと縮小スフィンクスがちょこんと座っているものもある。まるで遊園地のアトラクションだ。

「ねえタマ、町ってこんなだったかなあ？というより、あたし、いつの間に……」

野々はタマに繋がったリード線をぼんやりと眺めた。引越してきて、荷物を片付けて、それから外へ出ただろうか。不思議と間がすっぽり抜け落ちていて、まるで昼間見た整然と並んだ町とは異なる別の町に忽然と降り立ったようだ。タマがくりくりした目で見上げながら尻尾を振るが、そもそもタマを散歩に連れ出した覚えもなかった。

角を曲がった街灯の明かりの下を、頭にキャラクターっぽい犬の被りものを被った、白いシャツに着物と袴姿の長身の男が、カランコ口と下駄の音を響かせながら、右から左へと歩いてゆくのに遭遇した。なんとも珍妙な光景に野々は目を丸くさせ、声をかけて良いかどうか迷った。だが幸か不幸か、向こうもこちらの存在に気付いたとみえ、足を止めると、大きな頭をくるりと向けた。

「やあ僕と同じ顔だね。お名前はなんと言つのだい？」

男は少しくぐもつた声で気さくに声をかけてきた。多分、タマの名前を尋ねているのだろう。

「タマ」

野々は見上げる形で短く答えると、男は首を少し傾げた。

「タマ……かい？なんだか猫みたいな名前だなあ」

彼は不思議そうに言つと、野々達の側に歩み寄ってきた。そしてじつと野々を見つめてからしやがみ、タマの頭を撫でながらくすくすと笑つた。夜中だし、警戒しても良さそうな姿なのに、タマそっくりな被りもののせいか、少しも恐怖を感じなかった。

「うちにすでにいた猫の名前だったの、もう死んじゃったんだけど……」

悪い人には見えないと思つたら、普段通りの言葉が口から出た。

「……でもこの子、それが自分の名前だと勘違いしちゃつて、元の八皮つて名前じゃ振り向きもしなくなつて」

面白いですね、と彼はまたくすくす笑つた。顔は被り物で分らないが、声の調子からして、二十歳前後のようである。それにしても、何故この男は犬の被り物を頭に被っているのかが分からない。何かのイベントのマスコットだろうか。そう野々が尋ねかける前に、彼は立ち上がつて、すつと後方の闇に向けて腕を伸ばした。

「この先はね、デッドゾーンと言つて、とても危ない区画だから、足を踏み入れてはいけないよ」

「デッドゾーン？何の話よ」

彼は懐から小さく折り畳まれた紙を広げて野々に見せた。大雑把で中途半端な街の地図が描かれている。彼はその中の一部分を指して、現在地点です、と説明し、今度は赤く塗られた部分を指して、デッドゾーンです、と説明する。野々が行こうとしていた先は、彼の地図曰く、デッドゾーンの入り口だったようだ。

「嘘だ、この町はそんな物騒なところじゃないもん」

野々は頭を振つた。引つ越しのトラックから見た景色では、危な

い所なんてなく、昔とさほど変わらない穏やかさだった。

「いや、この街ではそうなんだ。デッドゾーンを見せて上げるよ」
男はスタスタと歩くと、振り返って手招きし、角を曲がった。男が立つ広場に入った途端に、野々は息をのんだ。薄暗い細い石畳の道とその両脇の壁一面に、朱の絵の具で目・耳・口の絵がそれぞれ描かれた紙切れが乱雑に貼られてある。とても分かり易いほどに危なげな場所だ。一体何の意味があつてこんな事をするのか、と野々は考えながら壁に貼られた『目』のポスターを一枚剥がして眺める。芸術というより、呪詛でもかかっているかのように陰鬱な絵だ。

「嘘、何これ……。あんなに長閑な町だったのに……」

デッドゾーンを出てから野々がぼつりと呟くと、男は犬の頭を左右に振り、おかしな言葉を口にした。

「ここは現実世界じゃないよ」

「はあ？」

野々は頓狂な声を出した。

「だからね、この町は確かに君がいた町だけれど、現実には存在しないもう一つの街なんだ」

野々は眉をひそめ、改めて男を観察する。この男は一体何を言っているのだろうか、と。確かに物騒そうな雰囲気のある場所ではあるが、ここが未知の世界とは、ちゃんとした大人の発言だろうか。からかっているだけか、でなければ頭がおかしいのかもしれない。

野々の疑心暗鬼を知つてか知らずか、男は淡々と話し続ける。

「勿論、夢であつて夢でもない。どう説明すれば理解してくれるのか、僕も迷っているのだけれど……」

彼は、そつだ、と拳を掌に一つ打ち、頷く。

「草平という家の縁の下に楕円の石があつてね、その下の土の中にブリキのロボットが埋めてあるんだ。それが出てくれば夢ではない証拠になるし、僕は変人かもしれないけれど頭はおかしくないつて分かるよね？」

野々は心を読まれたようで、びくりと肩を振るわせた。男の声は

終止穏やかな口調で、とりわけ怒ってはいなさそうだった。それどころか、とても良い考えだと言わんばかりに、犬頭を振って逆に喜んでゐる。

確かに彼しか知らないものが現実に出てくれば、信じざるを得ない。それに例えこれが夢だったとしても、夢だったと思うだけだ。

彼から詳しい住所を聞き、分かったと頷いた途端、突然辺りを黒い霧がふわふわと漂ってきた。目の前を闇が遮り、彼の姿もおぼろげになって、前後の区別がつかないほどに闇が覆うと、野々の意識は静かに消えていった。

第二話：現実の証拠は夢でない

目を開いた。真つ暗な天井の梁をしばらく眺めてから、ようやくここが昨日自分の部屋となつた四畳半部屋だと理解した。

あれは夢だつたのだろうか。

けれど妙にリアルな夢だつた。肌の感触が生々しかったし、夢の中で教えられた住所は番地までちゃんと覚えていて。

ベッドから起き上がって、開きっぱなしのカーテンから外を眺め見た。しんと静まりかえつた家々の窓と門柱に電気がぼつぽつ灯り、街灯がアスファルトを照らして周囲をほの明るくしている。ここから見る限り、奇妙な造りの家は一軒も見当たらない。

明日、調べてみよう。

学校は春休みだし、丁度行きたい所もある。

お腹が鳴つた。夕食がまだだつた事を思い出した野々は、部屋を一度振り返ってから階段を下りていった。

翌日の昼過ぎに、教えられた住所に行つてみる。住宅街の道は石畳ではなくアスファルトで、夢で見た家も一つとして無い。ごく普通の一軒家が並んでいるだけだ。ただ進むにしたがい、懐かしい見覚えのある風景が続いた。訪ねたかつた場所と同じだと気付いたのは、辿り着いた家を見てからだつた。

「まさか……」

野々は奇妙な感覚で家を見渡した。おぼろげな感覚で尋ねるはずだつたのに、まさかこんな形で辿りつけるとは思つてもみなかった。『草平』と聞いた時に、同じ苗字だとは思つたのだが。

コンクリートの塀に囲まれた、奥行きのある細長い平屋造りの家。斜めになつた錆びた鉄門が風でユラユラと揺れ、門柱のインターホンはコードだけを残して垂れ下がっている。風雨で薄くなった表札には、確かに『草平』と書いてある。人が住まなくなつて随分経過

しているが、そこは間違いなく、奇妙な男に教えられた家であり、同時に思い出の中の家でもあった。

野々は門内に入った。彼の言葉が正しいのならば、確か縁の下に大きな石があつて、その下の土の中にブリキのロボットがあるはずだ。手付かずの庭は、背の高い様々な種類の雑草が群生し、立ち枯れた樹木が塀沿いに並んでいる。虫たちにとっては最適な住居空間だ。

野々は雑草を踏み分けて、縁側の下から潜り込んだ。張り巡らされた蜘蛛の巣を枝でくると巻きながら例の石を捜し、やがて拳ほどの大きさの丸いお餅形の石を見つけた。

「嘘……あつた」

石をどけて枝で土を掘り、出て来た四角い木箱の蓋を開けると、野々は目を見開いた。中から彼の言う通りに、錆びたブリキのロボットが入っていたのだ。

「夢じゃ……ない？」

ならばあの町は一体なんだっただろうか？どこかの異世界、それとも地球と似た星の街とでもいうのか？野々は頭の中にファンタジックな言葉を次々と思い浮かべながら、庭を横切つて門外に出た。すると頭上から、もしもし、と男の低い声が振つてきて少し驚いた。見上げると、彫りの深い目鼻立ちに、鼻の横に大きなイボぼくろがある、二十代前後のラフな服装の男が、眉をひそめて立っていた。

「君は何者だ？何の用で空き家のこの家から出てきた？」

明らかに不審を露にさせた物言いに、野々は説明に困つて言葉を詰まらせた。素直に、犬の被りものをした男の言葉通りに異世界かどうかを確かめに来たらなんと本当だった、と言うべきか。いやそれでは、おかしい人認定間違いなしだろう。そんな不名誉はごめん被りたい。

「お、落とし物を取りによつ。絶対泥棒に入ったわけじゃないんだからっ」

野々は顎を上げて強気で言った。後で考えると、それはそれで別

の意味で怪しい。

「いや、そこまでは思っていないがな」

彼は人が良いのか純粹なのか、野々の言葉を少しも疑ってはいないようで、すぐに満面に笑みを浮かべた。

「変な言い方して悪かったね。突然姿をくらませた友人に代わって、主の失った家に悪さするヤツがいないか時々様子を見に寄ったものだから。ほら、最近この辺りも物騒だろ？」

「突然姿をくらませた？誰が？まさか草平祐人さんが？」

「なんだ、君は祐人の知り合いか。俺は目黒太志つてもんで、祐人とは中学時代からの友人だ。とはいえ、あいつは高校を中退して誰にも内緒で急にどっか行っちゃまったから、今でも俺の事を友達と思っっているのかは分からんけどな」

そんな。

野々の心臓が大きく跳ねた。一家がどこかへ行ってしまったのは父親から聞いて知っている。けれど草平祐人が高校を中退したのも行方不明なのも初耳だ。

「ちょっと待って、あたし、一家がどこかへ行っただって聞いてたんだけど」

明るい家族に、優しい笑顔を浮かべるあの人に、一体何が起こったというのか。

「まあ、どこかには違いないだろうな。なんせ御両親は四年前に火事で亡くしてるし、祐人は行方不明だし……」

「火事！？火事つてなによ！あたし、そんな話聞いてないっ」

草平家のなにもかもが初耳だったなんて。父親や叔父夫婦は知っていたのだろうか。知っていてずっと黙っていたのだろうか。

「どうして……」

目黒は、そうだなあ、と腕を組んで地面に目をやった。

「夜中にぼや騒ぎがあつてな、あいつの両親が一酸化中毒で死んだんだ。ストーブへの引火が原因らしいが、夜中にストーブをつけるでもなしに引火するのは変だってんで、一度祐人は警察に任意同行

されたんだ。まあ、疑いは晴れたわけだが、両親の入っていた保険がまた多額でな、それが祐人の懐に入ると、親戚やら近所の奴らやら学校の奴らやらが、良くない噂を立て始めたのさ。つまり、保険金欲しさに祐人が火をつけたんだってな」

「ゆう兄ちゃんはその酷い事する人じゃないよ！」

「ああ、俺もそう思う。けどな、あいつ自身は疑心暗鬼になっちまうって、高校を中退して、俺にも誰にも内緒で、金だけ持って消えたんだ」

目黒太志は平屋の家を仰ぎ見て、以来この家はずっと空き屋だ、と溜め息をついた。

野々は肩を落とし、足を引きずるようにして家路についた。途中で道路脇のドブに足を突っ込んだり、頭の上に鳩の糞を落とされたり、木に飛びかかりそこねた猫が上から落ちてきて引っかけたりしたが、何のリアクションもなく、ただただ地面に目を落としながら足を進めた。

キリン堂に着くと、店内を通り、扉で隔たった居住空間の奥の襖を開けた。机の前に座った叔父の恭介が、おかえりー、と夕刊から顔を半分覗かせながら陽気に言う。野々が机を挟んで前に座っても一向に返事を返さないの、不審に思った恭介は夕刊を置いて顔を覗き込んできた。

「どうしたの野々ちゃん、元気ないねえ。誰かに虐められた？それとも早速ホームシック？」

机の木目に落とした視線を、叔父に移す。

「ゆう兄ちゃんが行方不明って、伯父さん知ってたよね？火事で両親が死んだってのも、知ってたよね？」

恭介は、バレたか、とへらへらと笑った。

「まだ子供だったからさあ、本当の事はまずいかなーって思って…」

恭介のあまりの明るさに、野々は急激に顔を熱くさせると、膝に置かれた拳を固く握りしめた。

「それを判断するのは伯父さんじゃなくてあたしなの！」

そう吐き捨てるのと、二階の自分の部屋へ駆け上がった。真っ暗な部屋のベッドに飛び込むと、掛け布団に顔を押し付けて訳の分からない言葉を叫んだ。腹が立った。けれど小さな子供を思っただけで、誰も悪くないと分かっている。ただ感情はどうにもならなくて、叔父に八つ当たりをしたのだ。そんな自分自身にもまた、酷く腹が立った。

時間が経つと頭が冷えて、お腹もすいてきたので、野々は一階に下りて行った。襖を開けると、机の上には夕ご飯が並んであった。恭介も美和も野々が二階から下りてくるのを待っていたようで、恭介は姿を見つけると何事もなかったかのように、じゃあいたどころか、と陽気に言った。

第三話：裏の心に嘘はない

空を見上げると、以前見た渦を巻いた星の群生が、キラキラと瞬いているのが見えた。野々は鼻をヒクヒクさせて、昼間の空気と夜の空気は違うのだな、と思った。そして、また来てしまったのだな、とも思った。

様々な自分勝手な家が建ち並ぶ中、一軒だけごく普通の家がある。野々はその『草平』という表札が掛かった、奥に細長い平屋の前に立ち止まった。表札の横には錆びた鉄の看板があり、そこに弱々しく控えめな文字で『柎平塾』と書いてあった。明かりの灯った窓には、カーテン越しに人がユラユラと動くのが見える。とその時、堀の向こう、ちょうど目の前の窓が、静かに横にスライドし、鳥の被りものを被った和服姿の人が現れた。彼は自分の鳥頭を指差すと、少しくぐもった声音で説明し始めた。

「ツグミです。スズメ目ツグミ科。大きさはムクドリくらい。背面は黒褐色、腹面は白地に沢山の黒斑があります。日本には冬鳥として各地の低山地および平地に渡来します。こんばんは、また会ったね」

野々は拳をぎゅっと握りしめて声を絞り出した。

「ゆう兄ちゃんなんでしょ？」

草平祐人だから、ブリキのロボットの在処を知っていたのだ。そしてこんな現実の世界ではない所に逃げてきたのだろう。野々はそう思った。けれど当の彼は、ツグミの頭を左右に振って否定し、羽ではない指を鉄の看板にすっと向けた。

「ここにある通り、僕は柎平という名前だよ」

「でも、ここは草平家でしょう？」

「うん、そう。でもね、この世界では僕の家なんだよ」

「草平家の床下にブリキのロボットがあるって知ってたのは、本人だからじゃないの？」

「ちゃんと見つけたみたいだね、ブリキのロボット。でもね……」
彼はまたツグミの頭をゆっくりと左右に振る。

「……僕は、知っていたただけだよ。何故なら、隠したのは僕だからね」

野々はふいに、現実の草平家で会った目黒太志の言葉を思い出した。主の失った家に悪い事をされていないか様子を見ていたとか、最近この辺りも物騒だとか。

「あ、もしかしてあなた泥棒？しかもよりもよってゆう兄ちゃん
の家に盗みに入るなんて許せない！」

「人聞きが悪い。何も盗んじゃいませんって。いや、そうでもないか……？」

柘平はどろぼうかもしれない。良い人を装っているだけかもしれない。納得はいかないけれど、この世界に彼以外の知り合いは誰一人としていなかったため、野々は憤慨しながらも、柘平が手招きする草平家に渋々入った。

六畳、八畳、六畳と並んで一つの家となす、柘平の住居兼塾の平屋住宅は、奥の閉められた六畳間以外、必要最小限の家具しか置いていない殺風景な室内だった。間取りは現実と同じだけれど、こちらの方が綺麗に掃除されていて、柘平の潔癖さが伺えるほど清潔だ。野々は真ん中の八畳の和室に通されて、用意された座布団に座った。そこへ奥の台所へ引っ込んでいた柘平が戻ってきて、野々の前に湯飲みを置き、向かい合わせに正座する。

「僕は表の看板にもあった通り、柘平塾の講師をしていてね……」
柘平は座るなり、突然そう切り出した。

「……とはいえ、生徒は残念ながらまだ一人もいないのだけれど」
「あ、興味ないから」

野々が速効否定すると、柘平はがっかりしたように、クチバシの先から溜め息を漏らした。

「酷いな、塾の説明も聞かないで断るなんて記録ものだよ。聞いてみたら、意外と興味をそそるカリキュラムかもしれないよ？」

「うちの家訓の一つに、怪しい勧誘は速効断れつてのがあるから。だつてどう見ても怪しいでしょ？生徒になって欲しいなら、まずその被り物を取ってから言いなさいよ」

野々が柘平のくちばしを突つくと、彼は、わあ、と慌てた声を上げて、取れないように両手で頭をおさえた。

「人にはそれぞれ深い事情というものがありまして僕のそれも同種の理由によるものであり従つて……」

明らかに動揺して、手を交えながら柘平が早口でまくしたてていると、玄関のチャームがビービーとけたたましく鳴った。柘平は安堵したように肩を下げると、すいません、と野々に断つて玄関に向かった。ドアを開ける音と二言三言の話し声の後、訪問者を伴つて柘平が部屋に戻ってきた。

黒いソフトクリームを頭に乘せたような髪型に彫りの深い目鼻立ち、チベットの僧侶に似た服から出た足の裏は、皮が異常に分厚い。初めて会つたはずなのに、野々は彼をどこかで見たような気がした。彼は野々の姿を見つけると、一瞬躊躇したように立ち止まり、柘平にギョロリとした目を向けた。

「君に女性の訪問者とは珍しい。やはり私は帰つた方が良いのではないかな？」

「全然構わないよ」

いいよね、というように柘平は野々に顔を向けたので、野々も頷いて同意した。そもそも別に柘平と秘密の会話をしていたわけではないのだから、良いも悪いもない。

僧侶風の男は、では、と低い声で言うと、野々の斜め前に胡座を組んだ。柘平はまた台所に行き、お茶を煎れた湯飲みを持って戻ってくる、訪問者の前に置いてまた背中を丸めて野々の前に正座した。

「彼は僕の友人のカルマ君だよ」

カルマと紹介された男は軽く頭を下げて、野太い声で挨拶をする。「カルマと申します。仙人になるため日夜修行を致しております」

「私は鈴丘野々と……あつ」

野々は指をカルマの鼻の横のイボぼくろに突き立てた。その特徴のあるイボぼくろは、草平家で会った祐人の友人の目黒太志と同じだ。よく見れば、背格好も目鼻立ちも彼そのものである。

「目黒太志さん、そうでしょ？そんな変な格好してるから気付かなかった」

カルマは首を少し傾げた。

「変とは手厳しい。しかしどなたかと間違われている様子。私はあなたと会うのは今が初めてだが？」

「え、じゃあ双子？」

野々の言葉を柘平が手で制する。何か事情があるのだろうかと思っただけで、それ以上カルマに問いつめるのを止めた。

カルマは、おおそうだと、懐から出した四つに折り畳まれた紙を柘平に渡した。柘平は紙切れを眺めると、またデッドゾーンが増えましたね、とこの日二回目の溜息を漏らした。デッドゾーンとは、確かこの街の危険な区域の事だ。恐らくカルマは、その範囲が広がった事を柘平に知らせに来たのだろう。果たして野々の考え通りで、突然カルマは立ち上がり、礼儀正しく頭を下げると、そのまま部屋を出て行った。

戸が閉まる音を確認すると、柘平は野々の思っていた疑問を語りだした。

「この街はね、君の住む町の、住人達の精神が暮らす奥底の街なんだ」

住人の奥深い精神達が暮らす街だ、と柘平は説明した。そして現実で野々が会った目黒太志は表向きの目黒であり、カルマと名乗る彼は自分が望む本当の姿なのだという。

「だからこの街は、理性のない本能のみの身勝手な人達が、自分の好き勝手に家を建てたり、普段では考えられない行動を取ったりしている」

「あなたも？」

「うん、僕もそうだ」

「あたしも？」

「いや、君は違う。君はまだ、正式に町の住人になったわけではないから、そのままの君がここに居る。それに君には現実とこの街での記憶を持つているけれど、住人達は皆、現実での自分もこの街での精神の自分も、記憶には一切残らないんだ」

「草平祐人……ゆう兄ちゃんも、居る？」

しばらく間を空けてから柘平は、町を出ていなければね、と呟いた。そして思い出したように、そうだ、と掌を打つと、カルマから渡された紙切れを開いて見せた。

「最近この街で連続殺人事件が多発していてね、さつきカルマ君が知らせてくれたマップによると、デッドゾーンの範囲がこの前の倍に広がっていたよ。殺人事件はこの街ではさほど珍しい事ではないけれど、このデッドゾーンを縄張りとしている殺人犯は、正常な思考でもって大量に殺人を犯しているから、とても危険なんだ」

野々は顎に人差し指を添えて、柘平に質問する。

「もしもよ？もしもこの街で死んじゃったら現実ではどうなるの？」

柘平は、そうですね、と腕を組んで軽く唸ると、そこに答えが書いてあるかのように天井の梁を見上げた。

「現実では心を失うらしいよ。人形みたいに意志がなくなるそう。正式な住人ではない鈴丘さんは、確か植物状態ではなかったかなあ。あ、ごめん、うる覚えの知識で」

柘平は己の鳥の頭をぼんぼん叩いて、声を立てて笑った。

「そこ、笑う所じゃないからっ。にしても、良くそんな色々知ってるよね？だって現実の事は覚えてないんでしょ？」

「僕はこちらに居る方が長くてね、そうすると色々な人に出会うんだ」

野々が、ふーん、と返事するのと目の前を闇が覆うのとはほとんど同時だった。遠くで柘平のくすくす笑う声が微かに聞こえる。やっぱりそこ笑う所じゃないから、と言ってやったのだが、果たして

その言葉が柗平に届いたかどうか分からない。とにかく意識がどんどん遠くなり、ああまた現実に戻るんだな、とあやふやな意識の中でぼんやり思うのが精一杯だった。

第四話：部屋の中には何も無い

現実世界と非現実世界の流れる時間は異なる。眠っている時間があちらに滞在する長さであっても、8時間寝たとして精々2、3時間という短さだ。寝るたびに強制的に行かされる場所であるならば、うっかり危険に踏み込んでしまっ前に、常識だとか詳しいデッドゾーンの範囲等を知らねばならない。けれど別世界を理解するには、あまりにも時間が少な過ぎた。

「少ない」

朝食を前にして野々が呟くと、一緒にご飯を食べる恭介と美和が箸をとめた。美和は箸を置き、小走りに台所へ行くと、冷蔵庫を漁り始め、恭介はすまなそうに肩を落とした。

「ごめん、野々ちゃん育ち盛りだもんね。今晚から気をつけるよ」
野々は目をぱちくりさせて、掌を慌てて振る。

「え？違う違う。朝食も昼食も夕食も全然足りてるからっ。美和さんも違うからっ。じゃなくて、えっと、その、ちよっと考え事してたっつて言うっか」

「考え事ねえ……はっ、それはもしかして青春の恋話とかっ」

恭介は鼻息荒く身を乗り出す。

「ええ！？それ激しく違うよ！そうじゃなくて……そうだ、伯父さん、ゆう兄ちゃんはどこに行っただか知らない？」

恭介は止めていた箸をまた動かさし始めた。どうやら恭介は、居なくなつた男よりも恋話の方が興味があるようだ。

「さあねえ。祐人君の親族やら友達やらは随分探したみたいだけど、結局見つからないまま三年だからねえ。もう他の街にでも行っただんじやないの？」

「そう……」

朝食を済ませ、部屋に戻ってスポーティタイプの外出用に着替えると、狭い裏庭に行った。するとそこに美和がしゃがんでタマの頭

を撫でていて、野々の姿を確認すると、にこりと微笑んで桜色の唇を開いた。

「タマの散歩？」

「うん」

美和は撫でていた手を止めて、すつと立ち上がる。

「前にね、偶然祐人君を見かけた事があったの」

「え……」

「顔色が悪くて、ふらふらとしてて、まるで別人みたいだった。声さえかけられなかった。どこに居るか知りたい？」

野々はすかさず頷く。

「野々ちゃんが思い描く姿と違っていても？」

野々の思い描く祐人は、ずっと出会った頃の中学生のままだ。別人みたいとか言われても、あまりにその印象が深過ぎて想像不能だ。確かなのは、もう一度会いたいという気持ちと約束だけだ。

「教えて」

どんなに祐人に会いたかったか、皆は知らない。どんなに孤独だったかを知らないのと同じくらいに。

美和から住所を聞くと、タマを連れて教えられた住所に向かった。途中、草平家の前を通り過ぎると、門内から目黒太志が現れて、野々に向かつて、おう、と気さくに手を挙げた。

「いつぞやの子だな。今日は犬の散歩か」

「そうとも言えるし、そうではないとも言える」

「訳が分からんなあ」

目黒は額の汗をぐいと拭くと、白い歯を見せた。彼はどうやら草平家の庭で草むしりをしていたようで、緑のカッターシャツと紺のズボンに雑草をくっつけ、白のスニーカーには土がこびりついている。血色が良く、お洒落に眉を整え、苦労等まるでなさそうで、カールと名乗る目黒とは雰囲気は全く違う。

「本当に仙人になりたいのかな……」

「え？」

「いや、なんでもない。あ、草平家の庭の雑草を抜いてたんだ」
「ああ、まあな。手入れしてやらんと、お化け屋敷なんて言われちまうからなあ」

この人はきつと三年もの間、ずっとこうして誰も居なくなった草平家の面倒を見てきたのだ。そう思ったら、祐人の所在を独り占めしてはいけないような気がした。

「ねえ、草平祐人さんの居場所が分かったんだけど、一緒に来る？」
二人と一匹は駅前の繁華街の裏路地に入った。寂れた雰囲気の建物ばかりが並んだ場所に、今にも崩れそうな三階建てのアパートがある。その三階の端に草平祐人が住んでいるのだと美和に教えられた。

中に入ると、薄暗い空間に郵便受けと、反対側に廊下がずっと伸びている。目の前には、一人が通るのにやつとの階段があり、目黒が先頭になって上がった。三階で折れ曲がり、汚れた等間隔に並んだドアの廊下を真っ直ぐ進むと、一番端のドアの前で足を止めた。表札には達筆な文字で『草平』と書かれてある。

「ここに祐人が……」

目黒太志が緊張した面持ちで呟くと、野々は何の躊躇もなしにドアをガンガン叩いた。目黒は眉を上げると、おいおい、と慌てて野々の手をつかんで止めた。

「いきなりだなお前。会いに来て良かったのか、とか、誰にも連絡せずにここにひっそり暮らしていたかったんじゃないかって思わないか？」

「そんなの、こっちで勝手に想像したってしょうがないでしょ？」

「それは子供の考えだ」

野々の方眉がぴくりと痙攣する。

「あーあたし今すつごく後悔してるー。教えなきゃ良かったって」「すまん、言い過ぎた。いやーそれにしてもどうやら留守のようだが、どうする？」

目黒の言う通り、応答どころか人の気配さえ感じられない。

「帰りたければどうぞ帰って。あたしは当然待つけど」

「そのわんこは帰した方がいいんじゃないか？衛生的に」

「タマはあたしの弟なの。無芸だけど善し悪しはちゃんと分かっているのどうぞ御心配なくっ」

野々は早口でそうまくしたてると、廊下に座り込んだ。目黒もやれやれと首を振ると、その横にどっしりと腰を下ろした。

会話もなく一時間ほど経った頃、突如目黒が口を開いた。

「お前と祐人とは、一体どういった関係なんだ？いや、変な意味じゃなくて、その、あいつってあまり人に好かれるタイプじゃないからさあ。あいつは絵に書いたように優秀なやつだったけど、その反面、何を考えているのか分からない所があって、いつだったか、テストでカンニングをしたやつがいて、それを見つけた祐人が皆に聞こえるようにバラした事があつた。当然、カンニングしたやつが悪いだろうが、皆の前で恥をかかせた祐人の配慮のなさを逆に皆が責めた。祐人はどちらが正しいか判断を仰ぐために、カンニングしたやつのお父さんと校長と教育委員会に事の経緯を連絡したんだが、まあ、結局そんなに大きな問題ではないという事でその場は治まった。けどそれ以来、祐人は変人扱いされて、皆から敬遠されるようになったのさ」

「目黒さんはどうして？」

「祐人の気持ち分かるからな。やり過ぎではあるが、俺も不正は嫌いだから」

「そういうと目黒ははにかんだ笑みを浮かべた。その仕草が可笑しくて、野々も笑い返した。」

「小学生の頃、この町にいた事があつたの」

野々は抱えた足のつま先を指でいじりながら記憶の片隅を探る。「転校生だったから中々友達の入らなくて、あ、でも虐められていたわけじゃないんだよ？でも、学校でも、学校が終わってから、心から話せる人は誰もいなかった。ある日、学校が早く終わって、する事もないから公園のブランコにただ揺れていたら、ゆう兄

ちゃんが突然声をかけてきたの。君はいつも一人だねって。初対面だったのに色々話したなあ」

質問には常に答えが返ってきた。求めていたのは、会話ではなく、答えをくれる人だった。

「それからは度々草平家へ遊びに行くようになったんだ。ゆう兄ちゃんも、おばさんも、おじさんも、すごく優しく、帰るのが嫌になるほど楽しかった。また転校するって聞いたときは、すっごくお父さんを恨んじゃった。でもね、あたし約束したんだ。きつとまた会いにくるって、絶対絶対忘れないって」

「お前、祐人の事が好きだったんだな」

野々は顔を熱くさせて目を見開くと、黙ってうつむいた。

目黒太志が近くのコンビニへ買い出しにいき、昼食を済ませてから数時間後、軽い身なりの男が廊下を歩いてきて隣のドアを開けようとした。目黒は立ち上がると、あ、ちよつと、と男に声をかけた。「俺達は草平さんを探ねて来たんだが、生憎留守のようで、いつも何時頃帰ってくるか知らないか？」

男は鍵を回す手を止めて首を傾けた。

「さあ、最近見てないからなあ。一週間くらいかな」

「そうか。なら帰って来たら、すまないがあんたから俺に連絡してくれんかな」

「どうしてゆう兄ちゃんに連絡するように頼まなかったの？」

帰り道で、野々は目黒に質問した。二人と一匹の大小の影が地面に長く伸びている。

「黙って姿を消すような弱いヤツじゃなかったから、逃げるかもしれんと思った。お前には是非会ってもらいたいからな」

「うん」

目黒は微笑むと、すつと視線を外す。

「……それで、ちよつと気になったんだが、俺が仙人になりたいって、お前言ったよなあ。あれ、どういう意味だ？」

「え？別に意味なんてないよ。だってそうなんでしょう？」

「うん、まあ、そうかもなあ……」
街に沈もうとしている夕日が、赤く染まった目黒の横顔の、僅かに浮かんだ苦悶を照らしていた。

第五話：真実はどこにも潜まない

野々は暗い夜道を、街灯の明かりを頼りにうろつくと歩き回っていた。本当は柘平のいる草平家へ行きたかったが、地図を持たない野々には、この無法地帯の街の地理が全く分からなかった。

勘を頼りにひたすら歩いていると、やがて赤煉瓦が敷き詰められた円形の広場に辿り着いた。広場の真ん中にはポツリと街灯が立っていて、それを中心に七つの石畳の道が等間隔に真っ直ぐ延びている。広場の周囲には、白い壁に黒い木枠がはめ込まれた人気のない商店がズラリと並び、まるでゴーストタウンのようである。

その広場の中央の街灯の下に、五人の男女が鼻を突き合わせてソボソと話をしている。

「また誰かが……」

「細道は危険……」

「引きずった痕が……」

「目と鼻と口が……」

「みんな殺され……」

かいつまんで聞いても、かなり物騒な会話だ。

五人は野々の存在に気付き、一斉に振り返った。

「見た事ない人だわ」

栗色の巻き毛にミニスカートのセーラー服を着た男子生徒が、不審な目を向けて言う。

「お嬢ちゃんといえど、侮ってはならないだろう」

高級スーツに包まれた、ダンディな中年女性がニヒルな笑みを浮かべながら言う。

「誰も信じられない。あんた達だって信じられない」

短い髪のボーイッシュな服装をした女の子が、頬にえくぼを作りながら指さして言う。すると五人は疑われた事に腹を立てて、口々に罵り合いを始めた。

野々は彼らが言い合っている内に、その場を離れた。両側を壁に挟まれた細くて薄暗い道は、じつとりと湿った空気が漂い、道の向こうから吹く生暖かい風には、鼻を刺激させる嫌な臭気を運んでくる。

道を抜けた先は、少し開けた場所だった。互いの建物を背中合わせにした紙屑だらけの空間に、街灯の橙色が辺りをほんのりと照らしている。その明かりに足を踏み入れた野々の目が、一点に集中した。壁の隅の方に、向こう側に顔を向けて横になっている人が居る。寝ているのか精巧な人形なのか、ピクリとも動く様子がない。野々はその人の側に歩み寄った。そして恐る恐る顔を覗き込むと、口元を押さえて後ずさった。

目が、無い。

耳も無く、口のあった場所には、ぽっかりと穴が空いて、周囲が黒く焦げている。人形ではなく、人だ。初めて見る人の死体に、野々は呼吸を荒げてパニックに陥りそうになった。

突然、石畳の上の紙屑を突風が上空へと舞い上げた。野々は地面に落ちた紙切れを見て青くなり、空を見上げて凍り付いた。夜空からカサカサと音を立てながら落ちてくる紙には、朱色で描かれた目・耳・口のイラストが描かれている。それが生き物のように空中に舞い踊り、あざ笑うかのように立ち尽くす野々を包み込む。足下が、折り重なった紙で、石畳と男の死体を見えなくしてゆく。

ここはデッドゾーンの直中だ。

するとこの人は、連続殺人事件の被害者に違いない。

野々は周囲に目を走らせる。橙色の街灯に群がる羽虫。紙の落ちる乾いた音。自分の荒い呼吸。形の無い闇。埋まってゆく死体。殺人鬼の姿はない。けれど早くここから離れなければ危険だ。

背後にくしゃりと紙を踏む音がした。どきりと鼓動が跳ねる。反射的に振り返ってみると、そこに立っていたのは、背の高いペンギン頭の男だった。

「早く！」

柘平はいきなり野々の手首をつかむと、背後の道を走った。石畳の上を走る靴と下駄が木霊する。両側の街灯が、光の帯を作りながら後方へ伸びる。

どこまで走れば良いのだろうと野々が思った時だった。背後から強い光が迫り、やがて街全体が真昼のように明るくなった。色の乏しかった街並みは彩色に彩られ、渦を巻いた星々が消えて白い雲の浮かぶ青空へと変わってゆく。

道の途中で柘平は立ち止まった。

「心が滅びると朝が来るんだ」

目を丸くさせて周囲を見回す野々に、荒げた呼吸で柘平が説明する。見上げると、今度は青空がだんだんと暗くなってゆき、再び街に夜の闇が包み込んだ。

「さっきの人の事？」

野々が尋ねると、柘平は頷いた。

「犠牲者はこれで三十八人目になった。街には安全を保障する機関も殺人者を罰する法律もない。早く彼を止めなければ、現実の町は心を失った人ばかりになるだろう。それに……」

柘平は言葉を切り、静かな口調で話す。

「強い願望は心をも強くし、現実で制御する理性を壊して表に出てくるんだ」

「今は普通に暮らしてる人が、現実でも殺人鬼に変わってしまってます事？」

柘平は黙って頷いた。

そんな危ない人間を、どうして街のみんなは放っておくのだろうか？大勢で協力すれば、止められるのではないか。それとも、強要も体裁も気にしない人達からすれば、自分の命だけが守られれば、後はどこかの誰かが何とかしてくれるとでも思っているのか？

野々が考えを巡らせていると、頭上から柘平の声が聞こえたので頭を切り換えて見上げた。被りもので表情は読み取れないが、声の調子が少しトーンダウンしている。

「君ならどうする？もし殺人鬼が自分の知っている人だったら、鈴丘野々さんならどうやって彼を止める？」

それは暗に、一連の殺人鬼が柘平の知り合いである事を指していた。

「僕は彼を止めようと試みてきた。けれどご覧の通りの有様だ。どうすればいいだろうかと悩んでいた時に、君が再び町にやって来た」
野々は目を細めて柘平を見返して、声を落とす。

「『彼』って、あたしの知ってる人なの？」

柘平はしばらく黙した後、静かに重い名前を口にす。

「草平祐人」

目に映る全てが闇に覆い尽くされたような気がした。

どういう経路で草平家に辿り着いたのか覚えていないが、耳にカチコチと音が届いて、ようやく視線を足元から上げた。そこは前に通された真ん中の八畳間ではなく、襖で閉ざされていた奥の六畳間だった。殺風景だった他の二部屋と違って、土産物の置物や映画のポスターや本等がギュウギュウに詰め込んで雑然としている。その隙間に二つに折った布団が敷いてあり、枕元の棚に数種の動物の被り物が並んであった。さつき聞こえたカチコチという音は、壁の隅の古い掛け時計の音だった。

「ここは僕の寝室だよ。ここの方が落ち着くかと思って」

「この部屋に入るのは初めて。現実でも、この部屋にだけは入れてもらえなかったから」

「そうなんだ」

野々は足で物を押しつけて強引に座り、柘平は畳んだ布団の上に座った。

先に口を開いたのは野々だった。

「……いつから？」

唐突な言葉だったが、柘平にはちゃんと伝わった。

「一年、向こうの時間で三年。さつき鈴丘さんが見た通り、被害者

は皆、目と耳を切り取られ、口は焼かれる。どこで手に入れたのか、様々な武器を携帯している。目と耳と口の紙が張られた地域があったらう？そこを拠点に獲物を狩っているんだ。無差別だよ。それでも前はある程度予想がついたんだ。紙が先に張られてそこが危険だつてね。でも今は被害者が先で後から紙を張るようになったから、予想が全くつかない。被害者は増える一方だ」

「何故？何故こんな酷い事をゆう兄ちゃんが！？」

「君は、草平祐人に何があつたのかを、何も聞いていないのかい？」

野々は開きかけた口をまた閉ざした。聞いていたのだ。目黒太志から、親殺しの疑いをかけられて、学校を辞め、消息を絶つたと。きつとその間に、草平祐人の中で凶暴性が生まれたのだ。けれど理性がそれを止めたから、この街で鬱憤を晴らしているのだろう。

「……僕は何度も彼を説得したけれど、話に耳を傾けないどころか、逆に僕を殺そうと企んでいる。勿論友達だつたはずのカルマ君でも駄目だつた。でも、君を見つけた時、草平祐人の心を開いた彼女ならば彼を止められるのではないかと、僕は思った」

柊平は言葉を切ると、ペンギンのまん丸い黒目を真っ直ぐに野々へ向けた。膝に置かれた拳に力が込められている。掛け時計のカチコチ音が異様に長い。

野々は畳に目を落とした。い草が所々浮いている。それを指の腹で撫でながら、野々はぼつりと呟いた。

「わ、分からない……。今、頭の中がぐるぐる回つてて、何も考えられない。だつて、だつてそうでしょ？ゆう兄ちゃんがそんな、そんな酷い事考えるなんて……。だから」

「うん」

「少し時間が欲しい」

「勿論時間はあるよ。もうすぐ君は現実へ帰るだろうから。ゆっくり頭を整理するといいよ。それで、もし出来ない結論づけたとしても別に構わない。選ぶのは君の自由だ。気に病む事はない。けど仮に承諾したとして、僕は君に……」

柀平の言葉は続かなかった。意識的に切ったからか、野々の戻る時間がきたからか、何れにしても、浮遊した言葉が繋がる事は、永遠になかった。

*

ゆっくりと目を覚ました野々は、しばらく天井の梁を眺めていた。最初にあの街から戻って来た時も、こうやって天井の梁を眺めていたな、とぼんやり思った。空気に雑音が混ざっている。窓に目を向けると、雨が降っていた。考えなければならぬ事が沢山ある。しなければならぬ事もある。何から始めれば良いかを、頭の中で順番をつけていく。

息を吐き、手を伸ばして、枕元にある棚から携帯電話を持ち上げた。登録仕立ての番号に指を止めると、そつと耳に当てて目黒太志の声を待った。

店の入り口で傘を広げていた野々の背に、店に繋がるドアから顔を出した叔父の恭介が声をかけた。

「雨の中どこに出かけるの？」

「ちよつと友達に会ってくる。夕ご飯までには戻るから」

「車に気をつけてね」

オレンジ色の傘で飛び出した野々は、駅裏のアパートに住んでいる草平祐人の部屋へ向かった。階段を上がった三階の廊下に、待ち合わせしていた目黒太志が壁を背に立っていた。彼はしかめっ面をしながらも口元に笑みを浮かべた、複雑な表情で野々を迎える。

「祐人は帰ってきてないというのに雨の中探そうとは、お前もかなりしつこいな」

「しつこくても何でもいいの。とにかくあたしはゆう兄ちゃんに会わなきゃいけないの」

目黒太志は、へいへい、と苦笑いを浮かべて返事する。

二人はマンションの住人の部屋を全て回って、草平祐人の情報を

集めた。そして数少ない目撃情報を元に、ゲームセンタ、ガード下の公園、デパートの屋上、小さな喫茶店と、雨の降る中探しまわった。けれどどこにも草平祐人の姿はなく、服と靴ばかりが濡れるばかりで、有力な手がかりは何一つ得られなかった。

「もう今日は諦めた方が良い」

そう肩を叩く目黒の顔が、暗くて輪郭がはつきりしない。

「時間も時間だし、また今度にしる」

今度つて、いつ？いつまで彼を放置しておけというのか？あちらの時間で一年も殺人行為に及んでいるのだぞ？いつ本心がそれを許すか分からない状態なのではないか？

肩が寒い。

あの街の殺人鬼が現実に現れる前に。

傘の雨のはじく音が耳障りだ。

一刻も早く心に訴えなければ。

濡れた靴が気持ち悪い。

声が届かなくなってしまう。

降りしきる雨が、野々の心に決断を促す。与えられた時間がもう少ないのだと言われているような気がした。

その夜は、少しでも長い時間居られるようにと、早めにベッドへ潜り込んだ。眠れるだろうかと思ったが、歩き疲れたせいもあり、徐々に意識が下へ下へと落ちていった。

第六話：過去の想いは壊れない

赤や青や白の小さな星が集まった大渦は、暗黒の空間に浮かびながら、ゆっくりゆっくりと内に巻いて瞬いている。その中の青い星が突然尾を伸ばしながら夜空を流れ、街にある円形の広場へ滑り落ちていった。

黒猫の被りものを被った柘平は、平屋の屋根に膝を抱えて座りながら、その光景を双眼鏡で眺めていた。そして円形の広場へ落ちたのを確認すると、屋根に立て掛けた梯子で下りていき、下駄を鳴らして颯爽と走り去った。

円形の広場の中央にある薄暗い街灯の下で、野々はぼんやりと佇んでいた。大きな目を瞬きさせて周囲を見渡すと、広場には人の姿はなく、気配すらも感じられない。聞こえるのは、風に引きずられる葉と風にはためくスカートの裾だけだ。

静かな石畳の道を、辺りに下駄の音を響かせながら、徐々にこちらへ駆けてくる音が聞こえる。やがて暗闇の道から、黒猫の被りものを被った柘平が、袴を乱れさせて走ってきた。

柘平は肩で息をしながら、腕時計をチラリと見遣る。

「今から、公園へ行こう。この時刻に、必ず祐人は、そこへ現れるから」

円形の広場からほど近い場所に、闇の中にぽっかり浮かぶ、ブランコと滑り台だけの小さな公園がある。ひっそり静まり返って、誰の姿も見当たらない。走って移動した二人はそこで足をようやく止めた。お互い膝に両手をつき、息が整うまで荒い息を吐き続ける。柘平は腕時計に再び目を遣ると、野々の手を引いて草むらへと誘導した。そして途切れ途切れに声を潜める。

「あのブランコに、草平祐人が、間もなく来るはず」

突然、柘平は野々の口に人差し指を立て、親指で草むらの間を指

し示した。野々がそこからそつと覗いてみると、街灯の明かりの下に、いつの間にか背を丸めた赤い模様のセーターを着た若い男が、ブランコに座って揺れているのが見えた。手足が長く、白い頭髪をしているが、その顔は紛れもなく、成長した草平祐人だった。

野々は泣きそうになりながらも、心の中は複雑だった。あんなに会いたいと願った祐人と、こんな形で再会するとは夢にも思わなかったのだ。それも現実ではなく、心の底の街で会おうとは。どう話せば良い？どう笑えば良い？話したい事が沢山あったはずなのに、何故か一つも浮かばない。

柘平に肩を叩かれて我に帰った。彼は野々の耳に口を寄せて、蚊の鳴くような声で囁いた。

「僕がなんとか彼の武器を取り上げるから、その後に君が彼を説得して」

彼の武器？

野々は祐人を、色眼鏡で見ないで凝視する。右手にはサバイバルナイフ、ズボンの後ろには黒光りする拳銃のようなものが突っ込まれ、何かが入った硝子の瓶を膝の上に乗せている。虚ろな表情で皮膚は病的に白く、何かブツブツと呟いている。

野々は絶句した。本当にあれは祐人なのだろうか？草平祐人の面を被った別人ではないのか？

柘平はまた野々に耳打ちする。

「僕が合図するまで、何があっても絶対出てきてはいけないよ？」

野々は顔を強ばらせたまま、ゆっくりと顔を柘平に向ける。黒猫の目の奥が、野々をひたと見据えて、言葉にはないものを投げかけてくる。

柘平は公園の中心へ躍り出た。野々は言われた通り、草むらの隙間からそつと様子を窺う。手に汗がじつとり滲み、心臓はかつて無いほどの速さで鼓動を打つ。

祐人はブランコに座ったまま、前に立ちただかる柘平の姿を見上げた。遠くて二人の会話の内容は判然としないが、言い争っている

のは分かる。祐人はが後ろ手で、ズボンの拳銃を引き抜き、柘平に銃口の先を向けた。柘平は沈黙したまま、一步足を踏み出しす。空気が振動し、柘平の足下に小さな砂煙が上った。野々はビクツと身体を震わせる。柘平はまた一步足を踏み出した。音の後、また足下に小さな砂煙が上がる。それをもう一度繰り返すと、祐人のすぐ目の前に柘平が立ちばかった。とその瞬間、柘平の手が、祐人の膝の上の小瓶を激しくはじき飛ばした。転がる小瓶に祐人が気を取られた隙に、右手のサバイバルナイフを叩き落とそうと、手刀を繰り出す。が、祐人の動きの方が一瞬速く、振り向き様にナイフの右手を閃光させた。柘平は呻き声を上げ、腕を押さえながら地面に膝を突く。赤い液体がみるみる右腕の袖を朱に染めた。

苦しむ柘平の目の前に祐人が迫る。歪んだ表情で見下ろし、ゆっくりした動作で拳銃を持ち上げた。銃口の先が柘平の頭に向けられる。そして引き金に指をかけた。

「や、やめて、ゆう兄ちゃん！」

野々は草むらから立ち上がって叫んだ。空気が一変したようだった。足が震えて力が入らない。祐人は好きだが、武器を携帯した人はやはり怖い。

柘平から野々に拳銃が移動する。

「なんでこんな事するの？こんなの、ゆう兄ちゃんじゃないよ。目を覚ましてよ！」

拳を強く握り、届いてくれと祈りながら、声を限りに叫んだ。

祐人は拳銃を構えたまま、眉をひそめる。

「誰だお前。馴れ馴れしく名前呼んでんじゃねえよ！」

柘平は、待て、と狼狽した声で制して祐人を見上げた。

「彼女を忘れたのか？あんなに妹のように可愛がっていた鈴丘野々ちゃんだよ」

醜く歪んでいた祐人の表情が少し和らいだ。

「鈴丘野々……ああ、あの。久しぶりだなあ」

祐人は拳銃を持つ腕を下ろした。懐かしそうに目を細めて、昔話

に花を咲かせる。けれど野々の視線は、祐人の方へ向いてはいなかった。彼の後方に転がる小瓶。白と黒の混じった丸味のあるブヨリとしたものが幾つも詰め込まれてある。野々の顔色がさあつと青くなつた。

あれは、人の目玉だ。

祐人に視線を戻す。よくよく見てみると、セーターの赤い模様は血糊で、腰に巻かれたアクセサリーは変色して縮んだ人の耳だった。切つたのだ、柘平の腕を切つたあのナイフで。

小刻みに揺れる景色。幕を覆つた耳に高周波が鳴り響く。

野々の視線に気付いた祐人は、話を止め、腰にぶら下げた耳のアクセサリーを見遣ると、ああこれ、と笑いを噛み殺した。

「真実を聞かない耳を取つてあげたんだ」

後方の小瓶を拾い上げる。

「真実を見ない目も取つてあげた。そして……」

ゆらりと腕を上げて、銃口を柘平の口に合わせる。

「真実を語らない口は、人に迷惑をかけるだけだから取つて上げようね」

躊躇なく引き金を引いた。

湿気たライターの音が三回鳴る。

玉切れだった。さつき地面に向かって撃つたのが全てのようなのだ。

祐人は体を折つて笑つた。身をよじらせ、地団駄を踏み、美しい星空に向かつて祐人は笑い続けた。

「あはは、愉快だ！だつてそうだろ？いつもお前だけが得をし、俺は皆に見放されるんだからな。お、お前は常に同情を受けていたが俺は変人扱いされないように、いつつ馬鹿にならなければいけなかつたんだぞ！あはは、なあ知らなかつたろ？知らなかつたよなあ！」

祐人はひとしきり笑つと、無表情で柘平に指をさす。

「だつたら今度は、その逆をしようじゃないか」

祐人は瓶を投げ捨て、野々達の横を擦り抜けて公園を走り出た。

割れた瓶から飛び出した目玉が、地面に散乱してあちこちを見ている。野々は吐きそうになつて口を押さえた。その手が震える。背後で名前を呼ばれても、振り返られない。野々の全身を、祐人の恐ろしい言葉が支配して動けないのだ。

「ごめん、怖がらせてしまつて。それでも僕は確信したよ。彼は君に手出ししないと。だから……」

頭を軋ませながら柘平を見る。押さえた腕から血が滴つて、地面に赤い水玉模様を作っている。思ったより傷が酷そうだ。

「血が……」

「いいんだ。それよりも彼を……草平祐人を止めて欲しい。本当は君にこんな事をお願いしたくはないんだ。本当に……。けれど彼にはもう時間がなさそうだから」

柘平は背中が見えるほど深々と頭を下げた。

野々は口元の手をゆつくりと下げると首を振る。

「頭、下げないでよ。頼まれなくなつて、あたしはゆう兄ちゃんを助けたいと思っているんだから。何が出来るか分からないけど、何もしないでいるのは、嫌だから」

柘平は頭を上げると、そうだったね、と優しい声で言った。そして懐から折り畳まれた紙を取り出し、野々に手渡した。それは以前カルマが柘平に渡したデッドゾーンを記した地図だった。その一画を柘平は指で示す。

「祐人は多分、この辺りに居るはず。現実から来る時はいつもここに居るから、向こうに行くときも、きつとここからだろう」

それはつまり、祐人の殺人鬼の心が、現実の祐人を支配するといふ事か。

「さあ行つて。祐人は君にしか止められない」

見上げる野々に、柘平が頷く。それを合図に、野々は駆けた。

自分の荒い息に耳を傾け、喉の奥から込み上げる鉄臭いものを感じながら、街灯で浮き上がった道をひたすら走った。いつの間にか、脇を白い物体が平行してついてくる。走りながら見下ろすと、白黒

のフサフサした毛並みの中型犬が、舌を出しながら上目遣いで見詰めてくる。

「タマ!？」

タマは体を傾けると、横の細い路で立ち止まり、口をすぼめてオン、オン、オンと吠えた。タマの吠える声を聞くのは久しぶりだった。尻尾を踏まれても普段は鳴かないのに。タマは元々祐人から貰った犬だった。あの時は子犬だったが、もしかすると祐人の事を覚えていて、野々を彼の元へ誘導しようとしているのかもしれないかった。

「タマ、あたしをゆう兄ちゃんの居る所へ連れてって」

タマはびよんと一跳びすると、身を翻して細道に入った。

両側を高い壁が迫り、靴音と爪音が混じり合って壁に反響する。

角を曲がるたびに街灯の数が減ってゆき、とうとう明かりの無い細い道に足を踏み入れたが、タマの白い部分の毛が暗闇にぼつと浮かび、野々は宇宙空間にユラユラと浮かぶ白い毛玉を追い求めるかのように走れた。どこまでも続く細い道は真っ直ぐで、どんなに走っても、その先は闇ばかりで、何も見えない。

やがて目の前に光が見え始めた。左右の黒い壁が徐々に白へと変わってゆき、長いトンネルを抜けたかのように広い空間に飛び出した。

そこは現実の町の駅前繁華街によく似た場所だった。凸凹の石を敷き詰めた広い幅の道の真ん中に、路面電車の線路が左右に伸びている。道にそって等間隔に並ぶ街灯はどこよりも数が多く、周囲に高くそびえる建物の輪郭をくっきりと浮き立たせていた。

野々は辺りの光景に目を見張った。そこには、この街へ来てから今まで見た事もない大勢の人達が、野々の方を静かに向いていたのだ。一体どうしたのか、と思ったその時だった。一人が腕をすつと上げて後方を指した。それに見習うかのように我も我もと指が上がり、とうとう全員が同じ方向を指し示した。そこは道を隔てた高い建物に挟まれた横道だった。

と、なにやらボソボソと呟く声を聞いた。

「……俺が火をつけたわけじゃない。ぼやだったんだ。帰ったら家に火がついてて、煙もすごくて、仕方ないだろう？なにになんで俺を親殺し呼ばわりする？どこへ行っても、白い目と陰口が俺を追い詰めてゆく。何も知らないくせに……」

顔を上げた祐人を見て、野々は息を飲んだ。

祐人は笑った口が描かれたマスクをつけ、大きな目玉が描かれた黒のサングラスを掛け、垂れた鎖の先にリアルな耳がついたイヤリングを下げている。目と耳と口に固執したファッション。死んだ人から目を奪い、耳を奪い、口を奪う異常さ。

真実を見ない目、真実を聞かない耳、真実を語らない口、これらは人の陰口を意味しているのではないか。そして親殺しの疑いをかかけられ続けた事への憎しみが、彼をこんな異常な姿にした。優しさが仇となつて鬱憤を発散できず、ぶつける手段もないままに、心の街で殺人鬼と化してしまったのだ。

野々は立ち尽くしたまま祐人を見詰め、静かに諭すように言う。

「あたしは七年前のゆう兄ちゃんしか知らない。優しくて、かつこよくて、頭が良くて、物知りで、笑えばいつも爽やかな風が吹いて、あたしはその笑顔が大好きだった。それがゆう兄ちゃんの本当の姿だよ。今のその姿は、歪められた思いから自らが作り出した虚像だよ……」

野々は足を進め、祐人の目の前で立ち止まる。

「最初から心の歪んだ人はいないよ。心に醜いヘドロがついているだけだよ。一番最初の自分を思い出して、汚れた自分を助けようよ」

祐人はマスクから忍び笑いを漏らす。

「俺を救いに来たのか？だったら手遅れだ。遅いよ」

「まだ間に合うよつ。だってここは……」

現実の世界ではないと言おうとしたが、声が喉に引っかかった。首に冷たいものが触れる。視線をゆっくり下ろすと、ネオンの明かりで鈍く光るサバイバルナイフの刃が見えた。

祐人はナイフを突きつけたまま立ち上がった。突き出された長さだけ、野々は感覚無く後退する。置いてある小瓶に踵が当たり、嫌な音を立てて倒れると、畳の上に弧を描いて二人の間に転がった。目玉が描かれたサングラスが見下ろす。マスクに描かれた口が歪ませて笑う。

野々は静かにそれらを受け止め、微笑んだ。静かで穏やかな声で囁く。涙が一滴頬を伝い、首筋に当てられたナイフに零れ落ちた。「どうか、あたしで最後にして下さい」

祐人のマスクから荒い呼吸が漏れる。永遠とも一瞬とも思える時間が流れ、祐人は足を一步踏み出した。

小瓶に足を取られて祐人は身体を大きく仰け反らせた。野々は反射的に祐人の腕をつかむ。その光景を祐人が不思議そうに傍観する。派手な音を立てて背中で窓を突き破り、二人の体が外に投げ出された。

キラキラ輝く破片。

体のなにもかもが落ちる感覚。

空中のはずなのに、息苦しい。

自分を締め付けるものがなんなのかを知った途端に、重い生肉が潰れる音と衝撃が体に伝わった。

野々は瞼をゆっくり開けた。ぼやけた視界が次第にはっきりしてゆき、目を見開いた。自分の身体の下に、祐人が仰向けに倒れている。

「ゆう兄ちゃん！」

野々は叫びながら身体を揺するが、地面を見て息が止まった。祐人の頭から、生き物のように血がみるみる広がってゆく。

野々の視界が次第に滲んできた。喉の奥が詰まり、止めようのない涙が頬を伝う。

「ああ……」

命が流れてゆくような気がした。野々は祐人の血を止めようと頭の下に手を当てる。だが、その手の隙間から血はすり抜けてどんどん

ん流れた。その内背中からも血が広がり出したが、それでも野々は止血し続けた。

後頭部をふわりと撫でる手があった。歪んだ視界で祐人の顔に視線を合わせると、不気味なサングラスもマスクも消えていて、目を細めて小さな子供の頭をゆっくり撫でる、祐人の優しい顔があった。

祐人は口を僅かに開いた。

「良かった」

そして消え入るように囁く。

「ありがとう」

優しい風が吹く笑みを浮かべると、祐人の体から強い光が放たれた。

「い、嫌だっ」

野々は、目を開けていられない強い光に抱きついた。太陽があるかのように周囲一帯を夜から朝へと変え、不気味な裏通りを鮮やかにする。やがて光が弱まり、再び辺りを暗闇が包む頃には、祐人の姿はもうどこにも居なかった。

柘平が側に来て肩を叩くまで、野々はその姿勢のまま血の池に体を浸していた。

「これで良いんだよ」

柘平は膝をつき、虚ろに見上げる野々の血のついた頬に優しく手を当てる。

「ありがとう」

祐人と同じ言葉を同じ声で囁く。野々は奇妙な感覚を持ったまま、闇に解けようとしていた。

戻る時間が訪れたのである。

第七話：夢に目を背けない

張り付く瞼を押し上げた。カーテンの隙間から降り注ぐ朝日で部屋がほの明るい。掛け時計に目を向けると、九時を少しばかり過ぎていた。

野々は、乾涸びてしまうのではないかと思うほど喉が渴いていたので、身を起こして部屋を出た。階段を下りて台所にゆき、洗濯機の回る音を聞きながら冷蔵庫の麦茶を飲んだ。冷たさが詰まった胸を押し開くように広がる。勝手口からサンダルを履いて庭に出た。犬小屋の前で座るタマが、千切れんばかりに尻尾を振っている。まるで、野々の訪れを待っていたかのようだ。

野々はタマに近づき、その首にそつと両腕を回した。耳元から鼻を鳴らすタマの声が聞こえる。野々は腕に力を込めると、しばらくの間、柔らかい毛並みの首に顔を埋め続けた。

夕方、買い物袋を下げた野々が草平家の前を通りかかると、軽トラックが草平家に横付けされていた。門内を覗くと、玄関の前に、背を向けて立つ長身の男が直立していた。見覚えのある背を見詰めていると、男は振り返り、野々にニコリと微笑んだ。草平祐人だった。

「ゆう兄ちゃん……」

野々は祐人に近づき、しげしげと祐人を見回す。頭髮は黒く、顔に疲れは見られず、傷もどこにもなくて元気そうだ。なにより生きて目の前に居る。それが嬉しくて、野々は目頭をこすりながら笑みを浮かべた。

「あたしね、すごく心配したんだよ。でも、無事で良かった……。ねえ、またここに越してくるの？」

「こちらには荷物を取りに来ただけです。兄には看護師が付いているので、必要なくなったら私はこの町を出ようと思っています」

祐人は笑顔のまま、まるで他人事のように答える。

何かがおかしい。野々が眉をひそめて顔を覗き込むと、持っていた袋から買ってきた果物が一つ地面にコロリと転がった。野々は跪いて果物を拾い、何となく見上げると、祐人は笑顔を浮かべたまま、跪いて拾う野々の姿を、黙って見下ろしていた。貼りついた笑顔に心を感じない。

そうか、と野々は納得する。以前柊平が言っていた通り、窓から落ちて光に包まれた時に『祐人』の心は死んだのだ。目の前にいるのは、糸の切れたマリオネットであり、野々の追い求めた祐人は、もうどこにも居ない。

野々は唇を強く噛んで涙を堪えた。そうしてから祐人の手を取ると、口の端を押し上げた。

「お元気で、さようなら」

これで良いんだよ、と言った柊平の言葉が頭をよぎった。

「はい、さようなら」

ありがとう、と言った祐人の言葉が頭をよぎった。

その日を境に、野々が柊平の居る街へ行く事はなかった。理由は分からないが、ひよっとしたら祐人の事件が解決して、もう必要のなくなった存在だからかもしれない。

朝靄が立ちこめる早朝、野々はタマを連れて住宅地を散歩していた。少し肌寒い空気の中、タマの爪の音と息遣いが静かに響き、靄でぼやけた輪郭が時間と共に少しずつ鮮明になってゆく。

野々は、高台の住宅地を折り返してから帰ろうと思った。そこは最近見つけた穴場で、見晴らしが良く、朝日を眺めるのには絶好の場所だった。

長い石段を延々と上り、タマの白い息の間隔が増えると、町を一望できるてっぺんに辿り着いた。腰の高さの鉄柵がぐるりと囲んであり、そこから見下ろすと、住宅街がひしめきあって見える。東の

空に、朝日がちょうど顔を出したところで、町を新しい光が包んでゆく。前日の大雨で洗い流した空気は甘く清々しい。優しく撫でる風は、野々の二つに分けた長い髪とタマの白黒の毛皮を、海原のごとく柔らかくうねらせた。

朝日の美しさにうつとりする野々の視界に、こちらに背を向けて立つ人の姿が映った。光は正面から射し込んでいて、その人はその中に立ち尽くしているのだ。

黒いソフトクリームのような髪型の男は、くるりと振り返ると、ニコツと笑みを浮かべた。

「お早う鈴丘野々殿」

身にまとったオレンジ色の裾が、風でパタパタとなびいている。

野々は小首を傾げた。こんな奇妙な格好をした人を、いつかどこかで見たような気がするのだが……。やがて思い至って掌に拳を叩いた。

「目黒さん！？その格好どうしたの？それじゃまるで……」

自分をカルマと名乗った仙人志願の目黒そのものではないか、と野々は口には出さずに思った。しかしここは現実で、彼はカルマではなく、紛れなく目黒太志本人のはずである。

目黒は豪快に笑うと、澄み切った目で答える。

「私は昔から仙人になるのが夢でしたが、恥ずかしくてずっと隠してきました。しかしちょっと勇氣を持てば、なんともないものだとやっとなつてきたのです。君はいつもこんなに早起きなのですか？」

口調まで変わった目黒に、野々はあの街でのカルマと重なってなんだか調子が崩れた。

「え？う、うん、朝日は気持ちいいから。それにタマの散歩にも最適だし。目黒さんも朝はいつもここに？」

「いえ、今日は特別です」

目黒はそう答えると、朝日に目を向け、まるで修験者のように微笑んだ。昨日までは普通の親切なお兄さんといった感じだったのに、人とはこれほど早く変わるものだろうか。

目黒は朝日に目を向けたまま話し続ける。

「私は仙人の修行とは何かを考えました。色々試してみて、ようやくこれだと思う方法を見つけたのです。それは己の嫌だと思ふ事を毎日し、ストレスに打ち勝つ事です。そして、仙人と凡人の違いは、ストレスの有無なのだと分かりました」

意味はどうあれ、野々は黙って頷く。

「素晴らしい事に、己の最も嫌だと思ふ事を、私はとうとう見つけたのです！」

両手を広げ、目黒は爽やかな笑顔を浮かべた。まるで目黒の身体に後光が射したかのように、朝日が彼の背中を煌々と照らす。眩しくて野々は顔に手をかざした。

光の中に目黒が包まれる。

両手を広げた姿は十字架の影。

十字架がゆっくりと背後に倒れた。

清々しい表情を湛えたまま、ゆっくりゆっくりと。

時間が遅く流れる。

脳裏を掠める恐ろしい光景。

走って、手摺りに身を乗り出して、両手を差し出す。

だが今度つかんだのは、空気だった。

目黒は満面に笑みを浮かべたまま、野々からどんどん遠ざかってゆく。やがて飛沫を上げ、前日の大雨で増水した荒川の中に吸い込まれた。それっきり、目黒が顔を出す事はなかった。

第八話：伝えたい言葉はここにある

目を開けると、そこは白い壁で覆われた病室だった。周囲を見渡すと、開け放たれた窓から夕日が射し込み、微風がレースのカーテンを滑らかに揺らしながら、室内に新鮮な空気を送り込んでいた。反対側の開け放たれた入り口から、薬品の臭いが漂う。嗅ぐだけで重病人になったような気がした。

野々は身を起こした。朝よりも頭がスッキリしていて身も軽い。随分眠ったせいかもしれない。

開いている入り口から看護師が顔をひよっこり出して、気が付いたようね、と微笑んで、室内に入ってきた。

「具合の悪いところはない？」

看護師にそう聞かれ、野々は頭を振った。

「病院に向かっているよね、男の人が高台から落ちたのを見かけたの。あなたはその場で倒れて、駆けつけてみると軽い貧血を起こして倒れたようだったから、そのままここに運んだのよ。でも大丈夫みたいね」

「目黒さん、目黒さんは助かったんですか!？」

「今、警察が探してるみたいだけど……。それで警察の人が、目を覚ましたらその事で話があるから家に帰らないで欲しいって」

野々は呆然と布団に目を落とし、つかめなかった自分の手を見詰めた。

彼女は空気を変えるためか、明るい声で話しかける。

「そうだ、あなたのワンちゃんってとてもお利口ね。倒れたあなたを気遣うように鼻をすりつけていたのよ。ここに運ぶ間も側から離れなかったし、本当に主人思いの良い子ね」

野々は顔を上げる。

「タマ……うちの犬はどこにいるのですか？」

「タマちゃん、ていうのあの子？残念ながら院内には入れられない

から、表の階段を上った木に繋いでおいたわよ」

野々は彼女にお礼を言うと、病室を後にした。

自動ドアから外に出ると、建物を振り仰いだ。そこは小高い山の上に建てられた病院だった。三階建ての白い建物の周りには森が広がっていて、樹液の混じったひんやりとした新鮮な空気が漂っている。野々は肺いっぱい綺麗な空気を吸ったが、少しも気分は晴れなかった。右手を見ると、看護師が言っていた階段が上へと伸びていた。階段を上りきると、枝を伸ばした立派な楠があった。その根本にタマが座ってこちらを向いたまま、尻尾をパタパタと振って芝生を掃除していた。

「心配させてごめんね、タマ」

野々がタマの頭をわしゃわしゃと撫でると、タマは心配したよとでもいうように野々の掌をペロペロと舐めた。

野々はふと、タマの向こうに広がる景色に目を遣る。芝生の際に張り巡らせた木の手摺りまで歩くと、身を乗り出して、眼前に広がる光景を眺めた。茜色の空は高く、夕日で赤く染まった建物が、積み木の玩具のように小さく見える。ここはどうやら高台の住宅地よりもさらに高く、町全体がより一望できる場所のようである。

「また良い所を見つけたみたい」

ね、とタマに同意を得ようと見下ろすと、タマは景色とは違う方向をじっと見ていた。一体何をとその先に目を向けると、遠い手摺りに、こちらを背に眼下の町並みを見下ろす車椅子の姿があった。何も珍しくはないのに、何故か不思議な感じがした。しばらく眺めていると、さっきの看護師が隣に来たので、野々は直視したまま、看護師に車いすの人の事を尋ねた。

「彼ね、いつもああして町を見下ろしているけれど、本当に眺めているのかどうか分からないの。四年前に御両親を亡くされてから心を閉ざしてしまって、この前来た弟の祐人さんにも、まるで反応を示さなかったわ」

野々は驚いて目を見開いた。

「祐人？草平祐人さん？」

「そう、柎平さんの双子の弟の祐人さんよ。柎平さんは、今ほどじやなかつたけど、小さい頃から心を閉ざしていて、祐人さんが献身的に看っていたらしいわよ。御両親が亡くなられた時、心ない人達から保険金目当てに家に火をつけたんじゃないかって噂されていた時期もあつたけど、祐人さんはそんな酷い事をする人じゃないわ。だつてそのお金は全額お兄さんの入院費に充てたんだもの。でも耐えられなかつたのね、高校を中退してそれっきり行方をくらませてしまったの。この前ひよっこり現れた時はビックリしたけど、お兄さんから必要とされていないようなので町を出るつて聞いた時は、なんだか切なくなつたわ」

野々は遠くから柎平の後ろ姿を眺めた。首を少し傾け、被りものない髪が風に吹かれてサラサラとなびいている。まるで町並みを眺める人形のように、微動だにしない。

「草平さんに会つていく？」

彼女に尋ねられ、野々は首を左右に振つた。

真つ赤な空に浮かぶ色あせた白い建物、柎平の本体はそこに居たが、心はまだあの街に居る。彼に会う時はここではなく、あちらでないという意味がない気がした。

あたしを呼んで。

聞いて欲しい事も、尋ねたい事も、沢山あつた。

*

草原のただ中にある丸い池に、仄明るい満月が映つていた。頭上には月と、手が届きそうな満天の星が輝き、澄んだ風に吹かれた葦が、さわさわと心地よい音色を奏でている。池のふちに、膝を抱えて座る野々の姿があつた。嗚咽を漏らしてシクシクと泣き、湧き出る涙を拭おうともしない。

「野々ちゃん」

知った声を背後から聞いて、野々は勢いよく振り向いた。少し離れた所に、兎の被りものをした柘平が立っている。野々は立ち上がると、ゆっくりと側まで歩き、柘平の腰をぎゅっと抱きしめた。

「寂しいよ。悲しいよ。心細いよ」

「うん」

その頭を、大きな手が優しく撫でる。ふわりと心が温かくなった。「お帰り。そして、ようこそ心の街へ」

野々は言葉の意味がよく分からなくて、顔を上げると首を傾げた。柘平の兎の目をじっと見てみると、忘れた記憶が次々と蘇ってくる感じがして、足元がふらついた。その腕を柘平がつかんでくれたので、倒れはしなかったのだが、自分の手を見てぎょっとした。十四歳とは思えない小さな子供の手ではないか。思えば柘平の身長をより高く感じるのも、自分が低くなったせいだ。そう、野々は小さな子供に逆戻りしていたのだ。

「それが君の心の姿だよ。つまり、この街に本採用されたってわけだね」

「本採用？」

「そう。でもまさか僕と同じように記憶まで持つてくるとは思わなかったけれど」

柘平は腰に手をあてて、くすくす笑った。

野々は遠くに思いを馳せ、そして笑みを浮かべた。

「ねえ柘平さん、あたし、話したい事が沢山あるの」

風が強く吹き、葦が大きく波打つ。

「うん、全部聞くよ、これからもずっと」

どんな表情か分からないはずなのに、心なしか兎の顔が笑っているように見えた。

*

数日後、目黒太志の溺死体が海岸で発見された。発見者によると、

心の底に潜む街

恐怖と苦痛に歪められた、
壮絶な形相だったという。

第八話・伝えたい言葉はここにある（後書き）

長い話におつきあい頂き、有り難うございました。お疲れさまです。この物語は、落選したものを編集し直して生まれ変わった、いくつかある中でも、少し思い入れのある物語です。なので、感想を頂けたら、とても嬉しく感じます。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0132b/>

心の底に潜む街

2008年11月7日06時32分発行